

東京大学

理学部広報

第2巻 第8号 昭和45年9月10日

内 容

理学部会合日誌	2
教授会メモ	2
幹事会より	2
教官人事移動（7月1日より8月16日まで）	3
理学部ところどころ（臨海実験所）	4

7 月 理学部会合日誌

- 7 月 1 日 (水)
2 日 (木)
3 日 (金) 理・臨時カリキュラム委員会(15:00~17:00)
4 日 (土)
5 日 (日)
6 日 (月) 紀要委員会 (13:30~15:00)
7 日 (火)
8 日 (水) 情報科学設立準備委員会(11:00~13:00), 会計委員会 (13:30~16:00), 教務委員会 (15:00~17:00), 人事委員会 (14:30~16:00)
9 日 (木)
10 日 (金)
11 日 (土)
12 日 (日)
13 日 (月) 理学系研究科委員会 (14:00~16:50)
14 日 (火)
15 日 (水) 教授会 (13:00~17:00)
16 日 (木) 教官懇談会 (16:00~19:00)
17 日 (金)
18 日 (土)
19 日 (日)
20 日 (月)
21 日 (火)
22 日 (水) 主任会議 (13:00~16:30)
23 日 (木)
24 日 (金)
25 日 (土) 総合計画委員会 (10:00~14:00)
26 日 (日)
27 日 (月) 理職との会見 (12:30~13:50)
28 日 (火) 会計委員会 (13:30~16:00)
29 日 (水) 主任会議 (13:30~16:00)
30 日 (木)
31 日 (金)

3. 学科課程改正の件

天文学科および地球物理学科の学習課目に関して理学部規則の一部が改正された。また、生物化学科、生物学科および地学科についても多少の改正が報告された。

4. 学内状況等報告

○7 月 14 日評議会があり; 入試に関する機構を教養学部中心より全学的なものへと改める件, 改革委員会(教官)規定第2条の一部変更, などが審議された。

○概算要求関係

○科学研究補助金(一般研究など)

○安田講堂の修理など。

5. 人事委員会報告(島村教授)

職員の協議採用に関すること, 他。

6. 会計委員会報告(高井教授)

昭和 45 年度校費予算配分案について。まだ計数が通知されていないが, 配分についてはおおむね昨年通りの方針とする。さらに次回の主任会議にその方針を諮った上各教室に配分し, 9 月の教授会でこれを事後承認をすることとした。

7. 教務委員会報告(大木教授)

第 1 回会合を 7 月 8 日に行ない, 大木教授を委員長に選出した。当面, 検討すべき諸問題についてフリートークを行ない, 次回以降, それぞれの問題について具体的な討議を進めることとした。次回は 9 月 9 日。

8. 紀要委員会報告(高井教授)

6 月 1 日付で東京大学理学部と丸善との間に出版契約が結ばれ, 市販されることになった。

9. 幹事会報告(佐藤助教授)

7 月 16 日に改革問題について教官懇談会をひらく。

10. その他

委員交代

学生委員(全学)和田 靖助教授

学生委員(理学部)山下泰正助教授

高橋景一助教授

教授会メモ

7 月 15 日 (水) 定例教授会
(13 時~ 於 物理新館会議室)

1. 前回議事承認
2. 研究生に関する件

幹事会より

理学部教官懇談会

7 月 16 日 (木) 午後 4 時から 7 時まで改革委員会

理学部とところどころ

理学部附属臨海実験所

(教官) 中間答申第2章「大学像の諸類型」——特に理学部と教養学部との関連について、理学部教官懇談会が物理学教室会議室で開かれ、理学部長はじめ教官 22 名が出席し、改革委員の植村教授、朽津教授を中心にして活発な議論が行なわれた。主要な意見は次の通りである。

教育体制に関しては、liberal arts 的な教育の意義は認めるが、理学部の教官の立場で考えたときそれぞれの研究分野の後継者の養成を目指した教育を行ないたい考えの人が多いのが現状で、その結果、理学部では研究者養成を行なっており、社会の期待もその通りである。この目的のためには専門教育の期間は現状より長いことが望ましく、必要ならば教養課程の教育を引受けるのも止むを得ないであろう。理学部については縦割に近い線で、ただし若干の自由度を残したものが望ましいと思われる。

教養学部の問題については、教育内容の改革が先決問題である。無意味に学生を集め教官を集めて教育を行なうのは問題があろう。liberal arts education の理念を果しうる general college を作ることは、その意味で有意義であろう。ただし、文科系の学生の教育は general education で良いだろうが、理科系においては general education では目的とする教育ができないであろう。教養学部の改革には援助が必要であり、かなり均等に負担しなければならぬと思われるが、大学院教育の負担を考えると現実的には理学部には負担の余裕が無いのではなかろうか。

大学像についてのアンケート

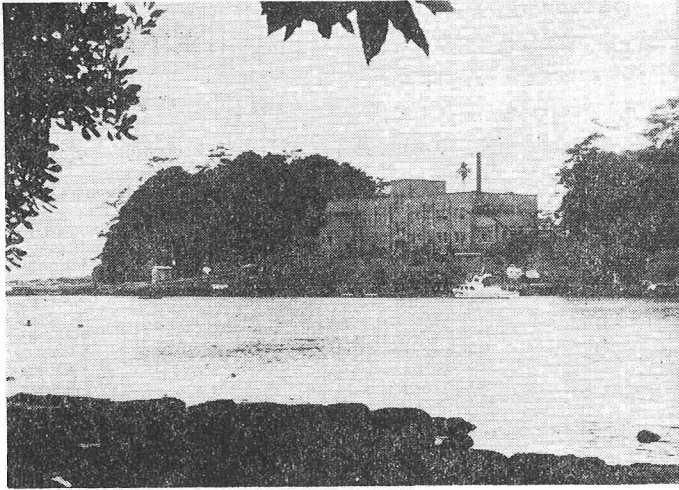
改革委員会(教官)は中間答申第2章「大学像の諸類型」についてのアンケートを8月上旬に行なった。これは近い将来に行なわれる全教官を対象とするアンケートのテスト的性格をもつもので、理学部においては各教室主任、理学部将来計画委員、幹事会メンバー、その他若干名にアンケートが配布された。回答は 29 通あり、幹事会の手で集計され結果をまとめられ、改革委員に渡された。

教官人事移動 (除退・休職)

氏名	所属	発令事項	発令年月日
富家雄	物理	講師に昇任	45. 7. 1
後藤英一	情報科学施設	教授に昇任	45. 8. 1
国井利泰	情報科学施設	助教授に配置換	45. 8.16
大保信夫	情報科学施設	助手に採用	45. 8.16

明治 18 年 (1885) 本学教官学生のための海産生物研究の場として帝国大学臨海実験所が開設された。場所は神奈川県三浦半島の突端、三崎の町で、現在地から約 3 キロのところにあった。これは現在恐らく百を越える世界の同種の臨海実験所のうち最も古いものの一つで、近代生物学創生期の当時に逸早く設立を提唱された動物学科主任箕作佳吉教授の達見の所産である。爾来八十有余年、その間油壺荒井城趾の現在地への移転 (1897)、大学官制の改正による理科大学への (1898)、さらに理学部への (1919) 所管変更、関東大震災 (1923) による大破、水族室・標本室ならびに本館の新改築 (1932~1936)、戦中の日本海軍部隊による、次いで戦後の米国軍隊による一時的接收 (1945~1946) とそれに続く荒廃など幾多の変遷を経ているが、生物学のめざましい変貌発展の中にあつて本所は世界に誇る業績を数多く世に送っている。初期のものとしては初代所長箕作教授のナマコに関する、また 2 代所長飯島教授の海綿や多毛類に関する分類学的研究や 4 代所長谷津教授のシャミセンガイの発生の研究など、主として記載的分野に関するものが著名であるが、次第に発生生理学、刺激生理学、組織化学、生理化学、実験形感学、行動生理学など実験的な分野の研究に重点が移ってきており、その数も年間 20~30 論文に達している。

現在実験所は三浦半島の先端近くにあり、油壺湾を抱く岬の大部分約 76,000 平方メートルの地域を占めている。付近の海は黒潮で運ばれてくる豊富な外洋性プランクトンのほか、内湾性の生物にも恵まれていて、泥地、砂地、岩場、浅所、深所から得られる特徴的な生物の多様性には目を奪れるものがある。本館南わきの弁天鼻(写真)の洞窟には弁財天の小祠があり、付近の漁夫の信仰の対象になっている。本館から北へ約 300 米距った丘の上には広い芝生がある。ここは土地の豪族三浦氏の居城荒井城の本丸跡である。1516 年三浦一族は北条勢の大軍の包囲を受け、3 年間の籠城の末この地で悲痛な全滅を遂げた。現在ここには教官学生の宿舎、食堂、クラブ室などが建っているが、これらを建てたとき土中から金色に輝く兜のくわ形などが掘り出され、実験所に保存されている。本丸跡を囲んで昔の空堀の跡が残っており、海に面した断崖には往時武器兵糧の貯蔵庫として使用された洞窟が幾つもある。なお、これら洞窟のうち、あるものは前大戦末期に特殊潜航艇「回天」の艇庫として使用され



諸磯より見た実験所本館（左：弁天鼻，右：採集船オペリア）

た。本丸跡の芝生の周囲の茂みの中には職員宿舎が点在している。

現在実験所には5名の教官職員が常住するほか、10名の職員が勤務しているが、この中には4名の採集人がいる。昔は採集人には名人膚の者がいて、広い海のいろいろな動物のすみかを自分で探し、よく知っていた。また、畑の文盲にもかかわらず普通に採集される動物の名称をすべて学名で覚えていて、若い学生を煙に巻いたものであったが、現在では僅かに最古参の出口重次郎氏にその名残りを止めるだけである。本所の施設設備は理学部および農学部水産学科の教官学生の利用に供せられるほか、教養学部、海洋研究所など他の学部や研究施設にも門戸を開いている。また、可能な限り他大学からの利用申込みに応じている。したがって、立地的な好条件も手伝って、各大学が休暇に入る夏の2か月間は実験所の研究室はほとんどフルに利用される。もっとも、最近では常時滞在の本学大学院学生の数が急増したので、満員の状態は慢性化しつつある。

実験所には大小2つの学生実習室がある。当所の重要な存在理由の一つは学生実習にあるとされている。学生は担当教官に引卒業されて毎回1~2週にわたって来所し、都市の騒音から離れ美しい自然環境に浸りながら全員寝食を共にする。この間学生は自ら海の生物に接し、生物の、また生物現象の多様性とそのうちにみられる法則性を生命の母なる海のほとりで学ぶのである。生物学関係の出身者から「臨海実習こそは自分の生物学への開眼が行なわれた機会であった」といった述懐を開くのも一再ではない。

ところで、このような研究教育活動の本拠である本館

は1936年に改築されたままの狭いものであり、研究設備もはなはだ時代遅れで、このままでは近い将来には世界の進展に追従することすら難しくなるであろう。また、当実験所の特殊性として、研究教育上の機能を十分に発揮する上で宿泊施設は大きい意味をもっているが、この大部分が明治の中葉以来のもので老朽化が著しい。特に炊事設備の非能率が研究者学生の受け入れに対する大きな隘路となっている。事実、今年からは常時滞在者の増加に伴ない、一度に13名以上の学生実習は残念ながらお断りせざるを得ない羽目になってしまった。われわれのものと前後して設立された欧米の幾つかの著名な臨海実験所はその後それぞれわれわれの数倍の規模をもつ大実験所に発展し、毎年大学が休みになる季節には世界各地の生物学者が集まって研究生生活を楽しむ中心的存在になっている。わが国では各地の大学理学部がそれぞれ固有の小さ規模な臨海臨湖実験所を持つとする傾向があり、その数も全国で20になろうとしている。わが国にも欧米の中心的臨海実験所に匹敵する有力な共同利用の臨海実験所を設けるべしとの案が醸成されつつあるが、それはともかくとしても、本所の施設設備の現状は世界的にはもちろん、国内的にみてもはなはだしくお寒いものである。

三浦三崎の地は東京から比較的簡単に往復できる。それで、付近は近年とみに各種の遊覧施設が氾濫し、海海の一部埋め立て、下水の放流などもあって、自然環境は急速に破壊されつつあり、何種類かの海の生物はほとんど姿を消してしまった。海岸の岩は観光客によって引くり返され、折角何年もかかって岩の下に定着した生物的環境は一環にして無に帰してしまう。風紀も悪くなり、

実験所に通じる小径には暴力団まがいの立売商人が現われて制止する職員は身の危険を感じることさえある始末である。実験所では 1928 年から水族室・標本室を公開し料金をとって一般の観覧に供している。これは本来は本学教育学生の研究教育のために必要な海の生物を飼っておくためのものであった。これが次第に公衆に対する教育サービスの色彩をより強くもつようになり、一時はわが国で最も典型的な水族館の一つとして年間 25 万もの入場者を数えたこともあった。しかし昨年隣接の地に私鉄の経営する近代的な水族館が完成してからは、年間入場者数は約 8 万に激減し、その社会的使命もほぼ終わったとみられるようになった。この際水族室・標本室のための人員施設を他に転用することを考えるべきではなかろうか。

このあたりは地殻変動の激しいところで、海に面した断崖の一部には、何度かの地殻隆起に伴なう満潮線の変化を示す貝殻の跡が列になってみられる。本学地震研究所では実験所本館わきの洞窟内に観測所を設け、また岬

の地下に作ったトンネルを利用して地殻の変動を継続的に測定している。また、この地は各種の石器の出土もあって、実験所対岸の地名を冠した諸磯遺跡は先史人類学上重要なものとされている。

観光ブームの波による環境の悪化はあるにしても、現在のところ理学部附属の臨海実験所の所在地としてこの場所以上に便利で適当な場所をわが国の本土やその周辺に求めることは困難であろう。晴れた冬の日には宿舎前の崖上上に立てば江の島はもちろん、富士、伊豆の山なみ、大島が手にとるように見える。春にはサクラ、ヤマツツジ、ヤマユリが次第に妍を競い、夏は潤葉樹林を野鳥が飛びかい、秋の夜には満天の星のもとすだく虫の音に心が洗われる。太古からの自然界の大きな流れに人間界の愛憎利欲をからませた変転の歴史を背景に、静かに自然を語り、生命現象を論ずるにはここ実験所は今なお絶好の場所であるといえよう。理学部諸兄の御来訪を待つ次第である。

(木下治雄)

編 集 和 田 昭 允 (広 報 委 員)
理・1号館 217号室 内線 2297